

Title	三浦半島見學旅行記
Sub Title	
Author	川野, 正雄(Kawano, Masao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.182(504)- 184(506)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

三浦半島見學旅行記

昭和四年五月二十五日(土曜日)快晴。

午前八時靈巖島解纜の小汽船三盛丸にて三浦半島見學旅行の途に就く、一行六名。

平穩なる海上開豁の展望を縦にしつゝ零時二十五分浦賀着、町の大半を占むるかと思ゆるドックや、西方山上にありといふ沼田城址等を望む間もなく、自動車を驅つて久里濱に向ふ。漂渺たる海原遠く見晴らす所、伯理提督の上陸記念碑立てり。

嘉永六年六月九日、異國の黒船に泰平の夢破られて驚喚せし所、星霜去來今は長閑なる天日の下、半裸の漁夫數人網繕ひに餘念なし。徘徊暫時、再び車を驅つて午後一時半津久井なる五明山最寶寺の門を叩く。寺傳に依れば當寺は源賴朝の時鎌倉に創建せられしが、足利時代に此地に移されたりといふ。請ひて寶物並びに古文書を觀る。就中永正十七年七月實如の裏書せし親鸞の書像、文龜二年二月同じく實如の裏書せる蓮如の書像(右兩裏書は今別に一冊に裝潢せられたり)はその最も優なるものなり。其他當寺開山明光の書像、同じく遺品等の外に、明徳四年十二月六日治部少輔安堵狀寫、應永十一年四月三日伊勢尾張入道常誠安堵狀寫、應永三十年十一月二十日僧明賢・明雅・明鎮各任上人口宣案、天正

十八年豊臣秀吉朱印禁制、庚刀卯月十三日里見氏朱印制札及び五月二十三日當寺宛按察使法橋奉書(端に門跡の黒印あり)、二月十日日本願寺奉書、二月十日刑部卿法印宛奉書(中に花押形あり)、六月五日按察使法橋書狀、五月二十八日富井正義書狀等の古文書類あり。

午後二時十五分最寶寺を辭去し、一路油壺なる新井城址に赴く。先づ舊二の丸址の三浦陸奥守義同、同荒次郎義意父子の墓前にその幽魂を弔ひ、次いで本丸址、壘垣さては三浦一族三年の籠城を支へし兵糧倉と稱せられる謂所千駄矢倉などを踏査す。五百有餘年の昔北條の大軍を引き受けて、兵戈激烈なりし當時の狀況、宛ら眼前に彷彿として轉々感慨無量なり。

此城の要害堅固はさる事ながら、左右に瞰下す油壺小網代兩灣の景勝大いに賞す可きものあり。又西方白雲疊々たる間富士の英姿の歴然として立てるあり。當時兵馬忽卒の間英雄闘將其英氣を養ふに足るものありしなるべし。

現今此處に東京帝國大學理學部の臨海實驗所あり。其標本室の珍らしき魚貝は我等一行の目を喜ばせり。

午後四時頃城址を去る。折から松風濤聲と相和し、非調を奏でて假初の訪問ながら、そゞろ別離の哀愁を覚えしめたり。

午後四時過三崎着、岬陽館に旅装を解き、直ちに發動機船を備うて城ヶ島に渡る。時恰も風浪高く巡遊する能はざりしも、西端の燈臺より四周の雄大なる展望を楽しむこと暫時にして三崎に戻り、更に町の中央なる三浦一郷の總社海南神社に詣て、附近の丘上なる櫻の御所址に上る。此の所は將軍賴朝山莊を構へて城ヶ島

一帯の鳥櫻を賞せし所と云ふ、斯くて薄暮に及び旅宿に還る。

五月二十六日(日曜日)快晴。

午前七時四十分、一行の自動車は三崎を後に衣笠に向へり。八時二十分衣笠着、衣笠公園に登攀し、頂上に立つて俯瞰すれば半島の山川聚落脚下に展開し、東方には房總の島山彷彿として横はり、西方箱根富士の連峯聳立して正に天下の絶景たり。

公園の隣接せる丘上に衣笠城址あり、是れ治承四年源頼朝の平家追討の旗擧げに真先に馳せ参ぜし、三浦一族の筆頭大助義明の居城址にして而も孤軍奮戦此老将の憤死せし所なり。而して現今箭執不動堂の存する所が舊城の二の丸、藏王權現の所在地が本丸址と云ふも、不動の堂守に従へば、不動堂の位置が本丸なりと主張せり。其の何れたるも此地はさして要害堅固の地とは思はれず。

不動堂の邊。雜草生ひ茂れる中に石塔狼藉たる墳墓數基あり。墓碑面に題して三浦家古墳墓と云ふ。正しく老将義明永眠の地なれども、近年之を弔する者更になく、殊に關東大震の際石塔倒壊遂に現状を呈するに至れりといふ。星霜移り人は去り、七百有餘年後の今日とはいへ、一代の英雄の安住所斯くの如きを思へば、轉々感慨に堪へざるものあり。徘徊暫し、辭して横須賀に向へり。午前十時二十分横須賀着、記念艦三笠を見學す。日露戦役の功勞艦、その昔宛らに保存せられ、當時を追懷せしむるもの深かりき。

一時間餘にして艦を下り、徒歩十餘町、逸見村塚山公園なる安針塚を弔す。塚は我國に渡來せる最初の英人ウキリアム・アダム

ス(三浦安針)竝に妻女馬込氏の墳墓、その事蹟は今更喋々するまでもあらざるべし。

松嶺嶺々たる邊、須叟の間を初夏の行旅に汗ばみし體に涼を取りて後、横須賀驛に下り、午後二時發の列車にて逗子に至り、直ちに自動車を驅つて金澤町稱名寺を訪ふ。

當寺傳來の寺寶竝に金澤文庫の遺書は多く散佚せる由なるも、猶ほ平安時代の文選古寫本斷簡、高師冬の稱名寺長老宛書狀、木版法華經、弘安元年十一月二日奉籠の三千佛、及び弘安七年二月付住持比丘審海の當寺條々規式、後醍醐天皇繪旨等見るべきもの多し、就中從來世上に重要視せられざりし稱名寺領田畠帳・水帳等の中に、金澤文庫に關する注目すべき文字あるを知れり、例へば文祿三年甲午八月十四日付の武州久良岐内金澤之稱名寺領田畠帳(大寶院花押)中の

字ふんこ

中畠 九セ廿三步 甚十郎作

又寶永二年酉十月二十六日附の金澤稱名寺水帳中の

御領所

光 上畠一段十二步 文庫 同人

壹斗二升六合

等の記録なり。又當寺本尊彌勒菩薩の胎内より出てしといふ經文及び之れを手寫するため使用せしと思はるゝ水筆、界線用の竹具、綴針等も珍貴なるものなり。

古書類の見學を終りて後、本殿に本尊彌勒菩薩を拜す。是れは現に國寶たり。尙此の厨子の背面に描かれたる佛壁畫も鎌倉時代

のものとして注意せらる。

それよりその傍なる釋迦像を拜觀し、鐘樓の梵鐘を見て後、新築中の寶物館を過り、洞道を抜けて文庫ヶ谷に出て金澤文庫址を見る。斯くて案内の寺主に謝して自動車上の人となり、一路杉田に向ふ。此處にて自動車を捨て、横濱を経て歸京す。

今茲に此紀行を摺筆するに當り、此行諸處に於て便宜を與へられし諸氏に對し一同深謝する次第なり。(川野正雄記)

寄贈交換圖書雜誌目錄

熾仁親王行實。	高松宮家
熾仁親王印譜。	高松宮家
靜かなる茶根譚新釋	高松宮家
時の爲に榮根譚新釋	高松宮家
聖賢遺書新釋叢刊七	高松宮家
佐藤言志四錄鈔釋	金雞學院
龜井一雄譯註	金雞學院
一齋	金雞學院
聖賢遺書新釋叢刊第八	金雞學院
東湖象山幕末四傑下	金雞學院
森滄浪著	金雞學院
松陰小楠	金雞學院
人物研究叢刊)	金雞學院
支那政教夜話下	金雞學院
赤池濃著	金雞學院
金雞文藝第九	金雞學院
日英交通史料三。	武藤長藏氏
昭和二年度古蹟調査報告第一冊。	朝鮮總督府
備後史談五の八、九、一〇、一一。	備後郷土史會
朝鮮佛教六三、六四、六五、六六。	朝鮮佛教社
江戸文學研究一一、一二、一三。	江戸文學研究發行所
風俗研究一一、一二、一三、一四。	風俗研究會

藝文二〇の八、九、一〇、一一。 京都文學會
 現代佛教六の六四、六五、六六。 大雄閣
 神社協會雜誌二八の八、九、一〇、一一。 神社協會
 上毛及上毛人一四八、一四九、一五〇、一五一。 上毛郷土史研究會
 人類學雜誌四七の八、九、一〇、一一〇二附錄。 東京人類學會
 伊豫史談五八、五九。 伊豫史談會

國體科學四三、四四、四五、四六。 國體科學聯盟本部
 國民經濟雜誌四七の二、三、四、五。 神戸商業大學商業研究所
 國學院雜誌三五の一一、一二。 國學院大學
 かたな三三九、三四〇、三四一。 中央刀劍會
 考古學雜誌一九の八、九、一〇、一。 考古學會
 民俗學一の一、二、三、四、五。 民俗學會
 民俗研究一五。 日本民俗研究會
 密教研究三四。 高野山大學密教研究會
 名古屋史談會誌三の一。 名古屋史談會
 奈良文化一七。 奈良文化學會
 歴史と地理二四の二、三、四、五。 史學地理學同放會
 歴史教育四の五、六、七、八。 歴史教育研究會
 歴史地理五三の四、五、六。五四の一、二、三、四。 日本歴史地理學會
 龍谷大學論叢二八六。 龍谷大學論叢社
 史林一四の三、四。 史學研究會